

## 6 M児の姿を通して（4～5歳児）

養護教諭 渡辺 誓代

幼児の発達はある程度個人差はあるが、年齢に応じて把握され、その発達段階を基に指導計画を立て保育をしている。しかし、それだけでは捉えきれない幼児もいる。専門家に幼児の姿を見てもらいアドバイスを受けながら、担任とともに養護教諭も個別の援助を探っているところである。

### ○M児について

4歳児9月に県外の附属幼稚園より転入してきた。初めは新しい環境に慣れていないため、他児とのコミュニケーションがとりにくいのかと思われ、担任と共に様子を観察していたが徐々に気になる言動や行動が見えてきた。

からだで学ぶ点が弱いというよりも、言葉の裏にある指示などがわかりにくいようだ。文字に興味が高く、ひらがなやカタカナはもちろん簡単な漢字は読め、声に出して正しく言える。しかし、会話となるとスムーズでない場面がある。

そこで、これまでも助言をもらっているポーターズ協会の専門家の協力を得ながら、援助していくことにした。

#### 事例1 「話し合いに来ないかな」

11月22日（月）4歳2学期

・したい遊びの時間にM児はプレイルームにいた。4歳児の数人が功技台やマットを出して遊んでいた。M児はその遊びに加わってはいなかったが、マットに寝転がるのが気に入って、寝たまま動かなかった。

A児 「M児くん、どいて」

M児 「・・・」 動かず

A児 「そこだめ、こっち」

M児 「・・・」 動かず

A児はM児のからだを抱いて動かそうとしたが、やはり動かず。

養護教諭 「M児くん、そこに寝ていたら危ないよ」

とM児のからだを抱いてマットから離した。 A児らはまた遊びを続けた。

M児 「けんかしちゃった」

養護教諭「けんかじゃないよ。話し合いだよ」

M児の使った『けんか』という言葉はその場に合わない言葉だと感じたため、言い直した。

M児 「・・・」

しばらく後、つぶやくように

M児 「A児くん、話し合いに来ないかな」

### ○養護教諭の学び

- ・ M児は「けんか」と言ったが、けんかの意味を理解していない。語彙は多いが、言葉の捉えが違つか、イメージが合っていないのではないか。
- ・ M児は友達とのコミュニケーション不足から、思いの行き違いを話すことを何でも「けんか」と捉えているのではないか。
- ・ 友達とのコミュニケーションに教師の介入があった方がスムーズなのではないか。この場合のように、『これはけんかとはいわない』という説明がその都度あれば理解できるのではないか。
- ・ 担任から聞いても、日頃のコミュニケーションに課題がありそうである。専門家の意見を聞いてはどうか。

### 事例2 「じょこうで一す。ゆっくり行ったださーい」 12月13日(月) 4歳2学期

お店屋さんごっこの迷路のコースが完成し、誰がどんな役割をするか相談を始めた。まだ決めていないような幼児らがM児を含め4、5人いた。そこで、M児の母からの情報をもとに用意してあった交通標識を見せた。

T教師 「先生、こんなの用意したんだけど、見たことある？」

幼児ら 「ある、ある、知ってるー」「知ってる、“止まれ”の看板だ」

T教師 「そう、これは“止まれ”の看板。だから、一人しか通れないところで、これをもって止まってもらう係を誰かにしてもらいたいなあ」

幼児ら 「ぼくやる」「ぼくもー」

T教師は、いくつかの標識を幼児ら提示した。最後に、

T教師 「じゃあ、これは？」

幼児ら 「……………」「止まれに似てるなあ」

T教師 「そうだね、止まれに似てるけど、違うねえ……。ねえ、M児くん、これわかる？」

下を向いて足をさわっていたM児は、ハッとして顔を上げ、標識をじっと見て言った。

M児 「じょう……」

まわりの幼児らが一斉にM児の方を向いた。

T教師 「M児くん、よく知ってたねえ。意味はわかる？」

M児 「ゆっくり行く」

T教師 「そう。これは、“じょう”で、“ゆっくり進んでください”っていう意味だよ。  
M児くん、この看板を持って入り口で『ゆっくり行って下さい』ってお客さんに言ってあげて」



M児は顔き、“徐行”の標識を受け取ると、自分の配置についた。お店が始まると

M児 「じょうで一す。ゆっくり行ってくださーい」

と大きな声でうれしそうに言った。

丁度この日は観察参観日であった。母親から以下のような連絡帳が届いた。

M児が興味を持って団体の遊びに交じれるように、標識などを利用して工夫してもらえていました。本当にありがとうございます。……幼稚園生活の中でいろんな体験を通して、友達とかかわるのは楽しいと実感してくれれば、次へのステップにうまくつながるのではないかと感じました。

#### ○教師と養護教諭の学び

- ・ M児は興味のあるものにとっても詳しく正確だ。
- ・ M児は何をすればいいかわかれば自信を持って行動できる。
- ・ 周囲の幼児らはM児の知識に感心していたようだ。
- ・ 丁度母親にもその姿を見てもらえる機会になり、安心してもらえたようだ。

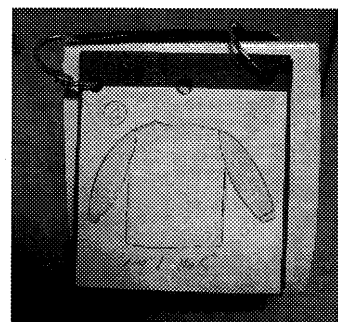
事例3 「このカードを使って着替えてみない？」 1月24日（月）4歳3学期

朝、着替えの様子を見に行くと、いつものようにM児は着替えに取りかからず、うろうろしていた。

養護教諭「M児くん、このカードを使って着替えてみない？」

M児 「う～ん。なあに？」

養護教諭「最初はタンスを出すんだよ」



とカードの初めの絵を指して話す

(M児 タンスを取りに行く)

養護教諭「できたらカードをめくって」といってカードをめくって見せた

(M児 じっとカードを見る)

養護教諭「次はシャツを脱ぐ」

(M児 シャツを脱ぐ)

カードをめくりながら、着替えを進めていった。B児らも近づいてきて一緒に着替え始めた。カードの最後になって

M児 「なんで最後は黄色なの？」

養護教諭「最後が違う色だと最後ってよくわかるでしょ」

M児 「ふう～ん」

養護教諭「さあ、着替え お・わ・り、遊ぼう」

M児は、製作コーナーに走っていった。

○養護教諭の学び

- ・ M児は、視覚に訴える物を見ながらの方がスムーズに着替えができるのではないかな。
- ・ これからカードを自分でめくりながら使えるように継続して援助していこう。

事例4 「今日はいつもとちがう？」

2月11日（金）4歳3学期

3学期に入って約1ヶ月、表現会の練習が続いた。ゆっくりではあったが、M児はみんなと一緒に頑張っていた。表現会本番が終わり、帰る用意をしている頃

M児 「今日はいつもとちがう？」不思議そうな表情で訊いてきた。

養護教諭「そうだよ。今日は特別だよ。」

M児はにっこりと笑った。

養護教諭「今日はがんばったね。もう帰るんだよ」

#### ○養護教諭の学び

- ・M児は練習に参加していても、この練習がいつまであり、いつ終わるのが言語の指示だけでは理解しにくいのではないか。
- ・M児は見通しが持てないなりに、みんなについて行こうととても頑張っていたのではないか。
- ・今後このような特別な練習がある時には、何か援助があれば混乱しないのではないか。

#### 事例5 「せ～の」

6月29日（水）5歳1学期

M児は宿泊体験のグループのリーダーになった。M児達のグループは食事のあいさつ係をすることになり、事前にグループみんなで声をそろえて言う練習をすることになった。輪になって座しているところへ、様子を見に行った。

養護教諭「なんて言うのかは決まってるんだね」

みんな 「うん」

M児もわかっているような表情をしている。

C児 「いただきます をします」（一人で大きな声で言う。）

D児 「みんなで言うんやぞ」

C児 「いただきます をします」（また、大きな声で言う。）

つられて2～3人は言うが、全員では揃わず。M児もきよろきよろしているだけで、声は出していない。C児が一人で先走っているなあ、M児は何をしたらいいか、わかっていないかもしれない。リーダーの役割も持たせたいな、と思い問いかけてみた。

養護教諭「みんなで言う時にはどうしたらいいかな」

E児 「せ～の って言えばいい」

すると、すかさずC児がまた大きな声を出した。

C児 「せ～の」

みんなは声を出さず、お互いすっきりしない表情で顔を見合っている。

養護教諭「せ〜のは誰が言えればいいの？」

E児 「リーダー」

D児 「M児くん！」

養護教諭「ではどうぞ」(M児の方を向いて手で合図した。)

M児 「せ〜の！」(大きな声でタイミングよく言った。)

みんな 「いただきます をします！」

みんなの声がそろった。手を合わせながらやっとみんなが笑顔になった。

### ○養護教諭の学び

- ・意図的にリーダーにしたわけではないが、役割がはっきりしているリーダーの動きはM児にとって、わかりやすかったのではないか。
- ・M児以外の幼児らがM児に注目する機会ができ、自信を持てたのではないか。

#### 事例6 「M児先生にみてもらったら？」

7月8日(金) 5歳1学期

M児は、自分からあまり友達とコミュニケーションをとろうとしない。教師が「〇〇君に言ってみれば？」と勧めても、黙っていることがよくある。教師には、自分から話し掛けてくるが、自分の興味のある内容を唐突に言うてくるため、会話にならず言葉遊びのようであった。養護教諭には、「喉を診るときは？」と毎日話し掛けてきていた。M児は内科や耳鼻科などの検診の際、とても興味を持ってのぞきこんでおり、そのことを覚えていて話すのだった。この興味を他の幼児らにも広げて、楽しい時間にならないかと考えた。いつものようにしたい遊びの時間にM児と出会った。

M児 「喉を診るときは？」

養護教諭「M児君、喉を診たいんだね。」

M児 「うん」

養護教諭「喉を診るときには何を使うんだっけ？」

M児 「ライト」

養護教諭「そうだよ、ライトを作って診てくれる？」

M児 「うん」

養護教諭と一緒に、新聞紙をペン状に丸めてテープで止め、黄色のガムテープを先に張ってペンライトをつくった。

M児 「できた。喉を診てみよう」

養護教諭 「あ〜。どう？」

M児 「大丈夫」

養護教諭 「よかった。他の人の喉も診てみない？」

M児 「うん。ぼく喉見やさんになる」

養護教諭 「喉を診る時、何て言えばいいかな」

M児 「喉を見せてください」

養護教諭 「そうだね。そう言ってみて」



M児は養護教諭とともに園庭に出て、歩きながら友達を探した。

養護教諭 「F児くん。M児くんは、喉見やさんなんだ。」

M児 「喉を見せてください」

養護教諭によりかかりながら精一杯手を伸ばして、 F児にペンライトを向けた。

F児 「あ〜」(大きく口を開けた。)

養護教諭 「どう？」

M児 「大丈夫です」

F児 「大丈夫か」(くすっと笑った。)

養護教諭 「よかったね」

次に保育室に戻り、他の幼児らにも声をかけた。 G児ら何人かが喉を見せてくれた。その様子をカメラで撮ってすぐM児と幼児らに見せると、うれしそうに笑い合った。

G児 「M児先生、次はだれ？」

M児 (次の友達を探しに歩き出す。G児達もついてくる。)

H児 「何してるの？」

G児 「M児先生に見てもらったら？」

M児 「はい」(ペンライトをH児に向けた。)

H児 「あ〜」

養護教諭 「どう？」

M児 「大丈夫です」

M児、G児、H児らは、楽しそうにけらけらと笑った。降園時、一度帰りかけたM児がロッカーのところに帰り、大事そうにペンライトを持って帰った。

## ○養護教諭の学び

- ・ M児は友達とかかわることが、できないわけではない。
- ・ 教師がいることやペンライトというアイテムを媒介としたことで、友達にもかかわれたのではないか。
- ・ M児の世界を一緒に楽しめる幼児もいる。
- ・ 今後、このような経験を増やしていくことで、M児の存在感が増し、かかわりを育むことになるのではないか。

## ～M児の事例を通して見えてきたこと～

専門家の助言をもらいながら、少しずつ個別に援助をしてきた。「M児のあゆみ」にあるように、何か手だてをすると反応があり、効果が見られたこともあった。

M児自身の行動によって、他とトラブルになることが少ないので、日々、平穏に過ぎると見逃してしまいそうな課題もある。そこを詳細に見てみると、つまずいたり、困ったりしていることが見えてきた。

## ○「M児のあゆみ」4つの側面から

### \*遊び、コミュニケーション

事例1からもわかるように、したい遊びを保育に位置づけて毎日展開していることで、M児のコミュニケーションの弱さが見えた。転入当初から、友達が話しかけても、顔を横にそらすなど、友達と距離を置いているような姿があった。しかし、かかわりを全て拒んでいるわけでもなく、教師の仲介を得て、かかわって過ごせるようになってきた。この同じ集団で進学していく、という特性からしても、集団の中での位置づけや存在感は、継続するものと思われる。幼稚園で教師が介入しながら人間関係を築いていくことは、大きな意味があるだろう。

事例6では、したい遊びの時間に一人でいることが多いM児にとって、教師とともに友達と過ごし、一緒に笑い合う経験になった。自分の好きなことに興味を持ってくれる人もいるんだな、ということをかからで感じられたのではないだろうか。5歳1学期の終わりには、M児の好きな水遊びやプール遊びの中で、とても楽しそうな姿があった。M児が安心して心地よいと感じる場を活かすと、他児とのかかわりを育めるのではないかと思われる。

### \*一斉の活動や行事、社会性

活動を新しく始める時には、担任等が幼児全体に向けて指導をする。教材を用いてわかりやすく説明しているが、M児は何をしたらいかが困っていることがあった。周りの様子を見てまねたり、聞いて行動したりすることが苦手なようだった。事例2の教師のとりくみには、4点の効果があったと思われる。①M児が何をしたらいいのか具体的に指示したことで、行動できた。②M児の興味のあるものを活用したことで、集中できた。③M児の得意なことを周囲にも広めて、幼児らにM児の存在感を示した。④母親からの情報をすぐに活用したことで、母親の



安心感につながった、である。

事例5は、年長児の大きな行事である宿泊体験に関する事例である。M児の日頃の様子から、この体験は混乱や不安が予想された。以前、専門家から「視覚に訴える教材として写真は簡単でわかりやすい」と助言をもらっていたので、宿泊施設の写真を撮り、個別に見せた。結果として、教師の不安ほどM児の混乱はなかった。それは、全体への指示が細やかで繰り返しあったことや、M児がリーダーになり、かえって教師からの指示が多かったことが功を奏したのではないと思われる。この活動では、リーダーをまず決めて、グループで行動することが中心であった。リーダーと決めたからには、同じグループの幼児らもM児をリーダーとして認め、支持する姿があった。M児も自分が注目されることを嬉しく感じていたように思う。M児にとっても教師にとっても、大きな収穫であった。

### \*身辺自立

毎日、登園してから運動着に着替えて過ごし、また着替えるという生活をしていることで、幼児らの生活力が身に付く。M児は技術的には他児と変わらないようなのに、何故時間がかかっているか、担任とともに観察した。「着替えをするよ」という言語だけの指示では、集中できないようで、目に入る物に気をとられている姿があった。そこで、ロッカーの配置を換えたり、事例3にあるような、視覚に訴えるものを作ってみたりした。着替えに要する時間は短くなり、自信を持って着替えられるようになったと思う。

しかし、カードの様式を教師の意図で変えようとする、M児の感覚と合わず、うまくいかなかった。結局、4歳3学期に毎日繰り返していた着替えが、M児に身に付きカードは不要になったものと思われる。が、水着の着替えになると場も要領も少し違うためか、裸になってぼんやりしていることがあり、運動着の着替えが水着の着替えにすぐ応用できないということもわかった。その場、その場で一つずつ手順をふまなければいけないのかもしれない。

### \*生活の見通し

転入当初、M児が集団の場にはいないことがあったが、それは居場所を他に求めていたり、気持ちを落ち着けたりしていたというよりも、新しくなった生活の見通しが持てないためであったように思う。事例4でのM児の言葉は、この活動はいつになったら終わるのかという見通しが持てなかったためと思われた。

その後の修了式の練習では、約1週間であったが右のようなスケジュール表にシールを毎日貼り、修了式本番まで不安なく過ごせ、修了式後にもとの生活に自然に戻れた。

しょうりょうしきの れんしゅう

2/28	3/1	3/2	3/3	3/4	3/5	3/6	3/7	3/8	3/9

れんしゅうはもうおわり

また、M児は、言葉の裏の意図を読むのが苦手なのか、指示が比喩的だと、言葉通りに受け止めてしまうことがあった。その都度、意

図を具体的に伝えたり、生活パターンを繰り返したりすることで、見通しが持てるようになった。以上を図に表すと、95ページの「M児のあゆみ」のようになる。

### ○母親の存在

M児を理解し、ともに育てるという点で母親との連携は不可欠であった。4歳2学期の終わりに、専門家を交えて話をし、M児の様子を聞き、園での気づきを話したことで、連絡帳や登降園時の会話が少しずつ増えた。母親からの連絡帳には、園での取り組みやM児の姿について書かれている。

86ページ事例2の後以外にも、次のような連絡帳があった。

4歳2学期 専門家との話の後 12月10日

今日は貴重な話し合いの場をもってください、ありがとうございました。少し「？」と思うことがあっても、何となく普通に過ごしてきたので、改めて子どもと自分たちを見直し、よりよい改善方法をお聞きし、勉強になりました。

4歳2学期 12月15日

ロッカーのお引っ越しの事、M児が言っていました。「先生がもっと便利になるようにしてくれて、使いやすかった」と説明してくれました。

4歳3学期 1月30日

「着替えの仕方」のカードを使っているそうですね。色分けして順番が書いてあると教えてくれました。時間はかかっても自分で頑張れば何でもできるということを実感しているようです。表現会でもてこずることがあるかと思いますが、よろしくお願い致します。

5歳1学期 6月18日

最近、野口英世の漫画伝記を繰り返し読んでいます。「かわいそう」とか「ここがすごい」とか、これまでと違う感想を言うようになってきました。自分自身も友達とのかかわりの中で、いろいろなことを感じたり、学んだりしている表れかなと思いました。

5歳1学期 7月5日

宿泊体験から帰った直後から、たくさん話してくれました。雨に降られたことも、友達と眠ったことも全て心に残る経験となったようです。先生方やお父さん先生のご苦労あっての大成功だったのですね。

今後も保護者とともにM児を育てるという姿勢を持ちながら、保護者の不安を軽減していきたい。

### ○養護教諭として

教師と養護教諭がチームで保育することで、多くの視点で幼児らを見ることができる。例えば、担任が全体に指導する場面で、養護教諭が同時に個別の援助をすることで、より理解しやすくなる。また、教師間での情報交換をすることで、M児が何につまずいているのか、どこを援助したらスムーズに動けるのか考えることができた。養護教諭は年度が変わっても、立場が変わらないので、幼児の生活を長い目で支えることもできる。M児がころもからだも健やかに成長し、集団の中でも健康であるように支えていきたいと思う。

### ○今後に向けて

今後、これらの援助がなくても、集団生活のコツをM児なりに得ていき、安心して生活できるようにしていく必要があるだろう。トラブルや悩みなど困った時にどうするのか、小学校への連絡も含めて、課題が残っている。友達と助け合いながら生活していくために、周囲に目を向けたり、楽しさを共有したりできる手だてやしかけをチームで作っていききたい。

行動・学習・対人関係等で気になる子の出現率は6.3%とも言われ、16人に1人はいる確率である。集団の中に気になる子がいるのは当然ともいえる。その子の困難さを理解し、援助をすることで、生涯にわたり自己肯定感を持って生きることができるような土台作りが幼稚園では必要である。今後、M児だけでなく気になる幼児への支援のシステム作りも課題の一つであろう。

